

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04532

研究課題名（和文）演劇的手法を活用したカリキュラムとその評価に関する実践的研究

研究課題名（英文）Action Research on Drama-Based Curriculum and the Assessment

研究代表者

渡辺 貴裕（WATANABE, Takahiro）

東京学芸大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：50410444

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：学校と協働して行った実践研究により、演劇的手法を用いて学校全体で授業改善に取り組む事例を生みだし、教師が演劇的手法の活用を試み始めるときに直面しがちな困難や、演劇的手法の活用の際に発揮される教師のわざ、複数の教員で取り組むことの意義などを明らかにした。また、こうした取り組みにおいて必要となる教師集団の学びのあり方の変革について、具体的な実践事例を生みだすと共に、その分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

演劇的手法の活用の試みが国内では教師個人あるいは単発の実践にとどまりがちななかで、学校全体での演劇的手法を用いた授業改善の事例を生みだし、その全体像を描く書籍（『なってみる学び』）を刊行できたこと自体が、大きな成果である。しかも、そうした取り組みにおいて必要となる、子どもの学びの変革と連動した教師の学びの変革のあり方を明らかにしたことは、演劇的手法の場合に限らない、校内研究・研修や公開研究会のあり方を考えるうえでも、重要な知見を導くことになった。

研究成果の概要（英文）：Action research was conducted in collaboration with schools. Cases of improving lessons through drama method as a whole school were created. This brought about findings about difficulties which teachers unfamiliar with drama method tend to face, teachers' artistry in using drama method, significance of team-teaching, and so on. How teachers should learn in lesson study sessions for lessons using drama method was also explored.

研究分野：教育方法学、教師教育学

キーワード：演劇的手法 演劇教育 ドラマ教育 身体性 想像力 教師教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

2000年代以降、日本の学校において、教科学習等で理解の深化を目的に演劇的手法(ドラマ手法)を用いる取り組みが注目を集めるようになった。「マイム」「静止画」などの技法を使って歴史上の一場面を生み出して歴史理解を深める活動などであり、渡部淳ら『学びを変えるドラマの手法』(旬報社、2010年)や小林由利子ら『ドラマ教育入門』(図書文化社、2010年)などの解説書も出版されている。演劇的手法は、「主体的・対話的で深い学び」といった学習像に合致する学び方であるだけでなく、この種の学習に関する議論で看過されがちな身体や想像力の要素を駆使するものである点でも重要である。

けれども、現状では、演劇的手法はたとえそれを取り入れている場合でも、ほとんどの場合、授業を活性化させるための一工夫にとどまっており、単発の授業を超えたカリキュラムの改善にはつながってこなかった。それには次の3つの理由が考えられた。

1つめは、演劇的手法の活用をカリキュラムレベルで捉える視点の弱さである。イギリスのドラマ教育の場合、演劇的手法をもとにカリキュラムの改善を図る取り組みが蓄積されてきた。例えば、「専門家のマント」という、学習者が専門家の役になって架空の依頼を受けさまざまな教科内容と結びついた活動を行う手法の場合、教科横断的な学習を可能にする原理としてこれを捉えて、そのための時間枠を時間割の半分近く設定するなどの試みがなされている。あるいは、D4LC(Drama for Learning and Creativity: 学習と創造性のためのドラマ)という2005年度から2010年度までノーフォーク州で行われたプロジェクトの場合、『ドラマを通じた学校改善(School Improvement through Drama)』という報告書タイトルにも現れているように、週1時間ずつ設けたドラマの時間と他教科の学習とを連携させその相乗効果を図るなど、カリキュラムレベルでの改善が見通されていた。日本の場合には、こうしたカリキュラムレベルで捉える発想が弱かった。

2つめは、日本における実際の取り組み事例の不足である。日本でも、芸術分野の一つとして演劇を捉えてそのためのカリキュラムを組み込むことは、成城学園の「劇の時間」などに見られるように一部の学校において行われてきた。けれども、演劇をさまざまな領域の学習を行うための媒体として捉えそれをカリキュラム改善につなげることはほとんど行われてこなかった。

3つめは、2つめとも関わって、演劇的手法を用いた学習に対する評価論の未確立である。カリキュラムレベルでそうした学習を位置付けようとするとなると、それに対する評価の手法や理念の整理が不可欠となる。しかし、非言語的情報が多く芸術的要素を含むという演劇的手法の性質に伴う評価の困難さのため、評価論の検討は特に立ち遅れてきた。

## 2. 研究の目的

本研究では、次の3つを研究の目的に据えた。

### (1) 国内の学校における演劇的手法を活用したカリキュラムの開発

すでに演劇的手法に個人単位あるいは学校単位で取り組み始めている小中高の教師たちと共に、ある教科の単元や年間指導計画で演劇的手法を位置付けたり、教科を超えたつながりを図ったり、演劇的手法に特化した科目を設けたりなど、カリキュラムレベルで演劇的手法を活用する取り組みを行う。それを通して、現在の日本の学校制度のもとで演劇的手法がどのようにカリキュラムの改善に寄与しうるか、事例を蓄積し、検討を行う。

### (2) 演劇的手法を活用したカリキュラムにおける評価論の構築

カリキュラムレベルで演劇的手法を位置付けた場合に、どんな評価のやり方が必要か、実践における試行を通して、検討を行う。それにより、演劇的手法を用いた学習の評価論の構築を図る。

### (3) イギリス等における取り組みの調査

(1)(2)の基礎作業に当たるものである。日本よりもカリキュラムレベルでの演劇的手法の活用やその評価に関して先行しているイギリス等での状況の調査を行う。

## 3. 研究の方法

(1)(2)に関しては、教師個人あるいは学校との協働による実践研究の形で進める。協同での活動試行 学校現場での実践 実践報告という自律的なサイクル、実際に身体を動かしながらそこで気づきをもとにアイデアを出し合う協働的・即興的な活動試行の2点を特徴とする「学びの空間研究会」の場を活用して、カリキュラム開発を意識しながら、学習活動のアイデア出しと試行、実践後の報告とディスカッションを行う。

(3)に関しては、特に、D4LCの主導者であったPatrice Baldwinが新たに始めたD4TTW(Drama for Thought, Talk and Writing: 思考、話しことばと書き言葉のためのドラマ)のプロジェクト、「専門家のマント」によるカリキュラム改善に取り組むネットワーク組織MoE.comなどに関して、文献調査・実地調査を行う。

#### 4. 研究成果

(1)(2)に関しては、演劇的手法を用いた授業改善に取り組もうとする複数の学校と協働して実践研究を行うことができた。それにより、さまざまな学年・教科での実践事例を生み出したことに加え、日本の学校でも、個々の教師による単発の授業にとどまらず、学校全体で、また、年間を通して、演劇的手法を用いた授業改善に取り組むことが可能であることを示した。なかでも最も大きな発展を見せたのは京都府の八幡市立美濃山小学校との取り組みであり、その成果は、同校研究主任の藤原由香里教諭と共に『なってみる学び 演劇的手法で変わる授業と学校』（時事通信出版局、2020年）にまとめて刊行することができた。

こうした学校と協働しての実践研究を通して、教師が演劇的手法の活用を試み始めるときに直面しがちな困難や、演劇的手法を活用する際に発揮されるベテラン教師のわざ、学年で複数教員で取り組むことによる実践の発展、評価の際に必要な考え方、継続的に取り組みを行うことによる演劇的手法の日常化などについて、明らかにすることができた。また、「表現と理解の相互循環」の原理を、具体的な事例に即した形で示し、他の各種「アクティブ・ラーニング」の形態との関係を整理した。

特に当初の予定を超えて研究が発展したのは、こうした取り組みを進めるための校内の教師集団の学びのあり方に関する部分である。教師らが演劇的手法を手がかりにして子どもたちの学びの変革に取り組むのであれば、教師らの学びの場である校内研修もまた同様の発想で貫かれていなければならないことを示し（「同型性」の原理）それを、子どもたちの学習活動の体験／追体験を組み込んだ、学習者に「なってみる」スタイルの校内研修として具体化した。そして、それにより、授業の捉え方の変化（学習者視点のものへと変わる）、教師同士の関係性の変化（対等な関係で率直な考えを出し合えるようになる）が生じることを明らかにした。さらに、こうした発想を、学校を越えた教師らの学びの場である公開研究会にも拡張することができること、またその必要があることを、具体的な事例と共に示した。

こうした一連の成果を、国内だけではなく海外でも、2018年7月にニュージーランドで開催された国際演劇教育学会（IDIERI）において発表した。そこでは、演劇的手法が、授業での教師・生徒関係を変えるだけでなく、同じ発想を校内研修に活かすことで教師関係の関係も変わることを指摘したことが、特に反響を呼んだ。

(3)に関しては、「専門家のマント」を活用したカリキュラム改革を進めるために2014年のMoE.comのワークショップに教師らが参加していた、イギリス・サリー州の小学校に、その後の展開を調査するために2018年2月に訪問し、授業観察を行うと共に、校長や教員へのインタビューを行った。同校では、かかる労力の大きさなどの理由により、「専門家のマント」を軸にしたカリキュラムの組み替えについては断念していた。けれども、教師によっては、演劇的手法の活用を継続していた。

また、演劇的手法の活用という点では共通する部分を持ちながらも、イギリスのドラマ教育とは別の系譜でもって発展してきた、アメリカのロイス・ホルツマンらによるパフォーマンス心理学について、2019年3月にニューヨークでのEast Side Instituteによる4日間のセミナーに参加するなどして調査を行った。そのうえで、演劇的手法を手がかりにして進めてきたこれまでの国内での授業改善や学校改革の試みに対して、パフォーマンス心理学の知見をふまえた検討を行った。

最終年度にあたる2020年度は、コロナ禍の影響を受け、予定していた学校との実践研究や海外での調査および成果発表が、軒並み取り止めとなった。一方、デジタル端末および遠隔通信技術と組み合わせた形での演劇的手法の活用について、複数の学校において調査を行った。空間を共有すること、そこで身体感覚を働かせることを何より重視してきた演劇的手法にとって、こうしたデジタル端末・遠隔通信技術との結びつきがどのような可能性および限界を示すことになるのかは、さらなる検討を必要とする。

同時に、今後、学習者にとっての演劇的手法を用いた学び方の習得過程やそこで教師が果たす役割についてさらに明らかにするために、2021-23年度の科研費基盤研究（C）「演劇的手法を用いた学習活動における教師の主導性と学習者の自律性」において研究を発展させていく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 渡辺貴裕	4. 巻 11
2. 論文標題 教育方法与教師教育の専門家としてのアプローチ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット	6. 最初と最後の頁 70-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡辺貴裕	4. 巻 9
2. 論文標題 教師自身の学び手としての感覚の活性化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ところ（大阪教育大学附属池田小学校編）	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Takahiro Watanabe
2. 発表標題 How can drama change not only children's but also teachers' learning at school?
3. 学会等名 International Drama In Education Research Institute (IDIERI) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 石黒広昭、漢幸雄、衛紀生、坂崎裕二、澤村潤、渋谷江厘、松浦正和、森さゆ里、西川信廣、林英樹、深澤伸子、館岡洋子、常田景子、本堂晴生、渡辺貴裕、川島裕子、内田祥子、宮崎隆志、大島広子、佐藤茂紀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 219
3. 書名 街に出る劇場	

1. 著者名 渡部淳、青木幸子、小菅望美、関根真理、高尾隆、武田富美子、辻本京子、初海茂、早川則男、林久博、藤牧朗、藤光由子、槇野滋子、宮崎充治、両角桂子、和田俊彦、渡辺貴裕	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 参加型アクティビティ入門	

1. 著者名 赤木和重、砂川一茂、岡崎香奈、渡辺貴裕、村上公也、麻生武、田中真理、茂呂雄二	4. 発行年 2019年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 196
3. 書名 ユーモア的即興から生まれる表現の創発 発達障害・新喜劇・ノリツッコミ	

1. 著者名 渡辺貴裕、藤原由香里	4. 発行年 2020年
2. 出版社 時事通信出版局	5. 総ページ数 304
3. 書名 なってみる学び 演劇的手法で変わる授業と学校	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------